古河文化見聞録

漢字
～その歴史となりたち～

漢字のはじまり

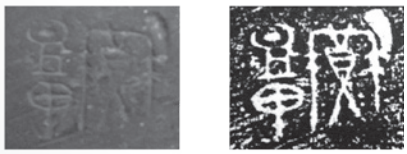
漢字は中国に起源を持つ文字です。中国の漢民族が使用したので、「漢字」といいます。

漢字の歴史は古く、その起源は黄帝の時代に、蒼頡が砂浜を歩いた鳥の足跡を参考に作ったとされているようです。黄帝も蒼頡も伝説上の人物ですから、この起源譚はもちろん伝承の域をでません。また、古代中国の占いの書物である『易経』には、聖人が漢字を作ったとも記されているようです。

さて、現実に立ち返って、現存最古の漢字はというと、一般的には古代中国王朝商の都「殷墟」から発掘された甲骨文字だとされています。これがおよそ3300年前(紀元前14世紀頃)だといいますから、その古さが判ります。日本で言えばまだ縄文時代晩期のころでしょうか。甲骨文字は言わずと知れた占い(卜)の文字です。あえて詳述すれば、亀の甲羅や牛の肩胛骨などの裏側に小さな穴を開け、そこに加熱した金属棒(青銅製とされる)を差し込んでしばらくすると、「卜」型の亀裂が生じます。その形で吉凶を判断するのですが、その判断内容や結果を甲骨に刻みました。この文字のことを甲骨文字というのです。

歴史と書体

こうして発生した漢字は、時代とともに文字数が増加し、また字形を変えながら発展していきます。文字は青銅器にも鋳込まれるようになり、こうした文字を金文と呼んでいます。また、陶器などに刻まれた文字を陶文といいます。



▲陶文「豆里益」

国が乱立した混乱期の春秋戦国時代には、地方ごとに使用する文字体が異なるという事態が生じます。これを統一したのが秦の始皇帝で、その統一した文字を小篆といいます。甲骨文・金文・小篆は広義の意味では篆書と総称されます。図①に示したように、甲骨文字から金文、小篆と順次簡略化されてきているのですが、まだ書き辛い文字であることがわかるかと思います。

こうしたなか、秦から漢王朝にかけて下級の役人を中心として、より書きやすい直線的な文字に変化していきます。この文字を隷書といい、隷書の走り書きがやがて草書になります。一方、隷書がさらに直線的になったものが楷書なのです。楷書は後漢末期ころに確立したとされ、以後日本では現在まで一般的に使用されることになります(現代中国は簡体字に移行)。さらに楷書を崩した文字が行書となり、書道などでみられる篆書・隷書・楷書・行書・草書、いわゆる5体の文字が成立することになります。

ちなみに、現在パソコンや書籍の主要な文字体である「明朝体」は、中国明王朝のときにできたのでその名がついているのですが、元をたどればやはり楷書に行き着くことになります。

漢字のなりたち

少々堅苦しい話になってしまいましたので、ここからはごく簡単な文字の成立期の字形を示しながら、その由来を紹介します。

まずは「人」(図②)。「ひと」を横から見